

一九四六年のこと

さて、炭坑では毎年桜の咲く頃、花見を兼ねた山のお祭が行われる。今年で労務係は

引退するという、前記大ボス平塚さんの宅で花見することになり、そこへ出向いた私は、外勤労務係山東と大乱闘になった。このけんかは、用意されていたものらしく、酒宴酣となる頃、山東が私に執拗にからみはじめた。私は最初のうち「この男酒ぐせが悪い」ぐらいに思っていたが、次第に彼の言葉や態度が、私に対する敵意とけんかを売るものに変ってきた。私も血の気が多かった。何時までも聞き流しも出来ず、席を立とうとしたとたん、こん棒のような物で足を払われた。

「家の中では迷惑をかける、外に出よう」と、私は叫んだように思う。外で取っ組み合いとなり、暗い庭で上になり下になり争っていたが、誰かが仲裁に入り山東は家の中へ連れ込まれた。私はそのまま玉置の家へ帰った。足を怪我していた。とりあえず消毒し、横になったが落ち着かず、玉置の斧を持って山東宅へ出掛けた。山東はまだ帰宅せず、妻君がオロオロしていた。私を気づかかって玉置の長男やその友人達、二十歳前後の若者六、七人が「生意気な労務係山東をこの際やつつけてしまえ」といきり立ち、職員社宅を包囲した。

遂に山東は朝まで姿を見せず、翌日も欠勤した。私は翌日、事の成行を労務係長に話し、医局で治療と診断書を求めたが、医者はどうしても診断書を書かない。治療費も自己負担だと言う。自己負担でもいいから診断書をと迫ったが、治療はしてくれたが、遂に診断書を書

いてはくれなかった。後で聞いた話だが、けんかによる怪我は、裁判になったとき色々と煩わしい問題が起る可能性があるため、出さないのだそうだ。

翌日、平塚のじいさんが山東をつれて労務係長の処へわびに来た。係長は私を呼んで「こらえてやれ」という。山東もまた怪我をしていた。私は、自分は水に流すにしても、自然発生的に起きてきた若い人達の不満を、どのように鎮めるのかと、係長と平塚のじいさんに訴えた。そのことについては、今後外勤係の教育に力を尽すことを係長が確約するので、その旨を私から若い人達に伝えるよう、また改革要望事項など青年の言い分も聞いてくるよう話がついて、この争いは一応終止符を打った。

それ以来、私は青年達の顧問格となり、間接的に労働組合に参加できるようになった。間接的というのは、私はまだ労組の代議員でも職場委員でもないで、青年の代議員や私の処に相談に来る職場委員を通じるより外に、組合へ発言する方法がなかったのである。

*

戦後メーデーも復活した。一九四六（昭和二一）年五月一日、吉隈坑協和会館（後日労働会館と改称）で組合員を集め講演会が開かれた。私も参加したが、メーデーに関する講演で

はなく、それは選挙準備の顔見世興行にすぎなかった。メーデーの意義は全くうすれたまま会は終わろうとするので、私は講演の終るのを待って「労働歌の歌唱指導をします」と大声を張りあげて飛び出した。『聞け万国の労働者……』と歌い出すと、幾人かその歌を知っている人もあったので、この日のために用意しておいた歌詞を散布し、何度かの練習のあと大合唱がはじまった。この年はまだメーデーの意義についての私の意見はさしひかえた。

*

炭坑では、いくら仕事の出来る人間でも、独身ではいつズラカル（炭坑ではケツワリという）かも知れないと言うことで信用されない。妻子があるなら早く呼ぶようにと、労務係長から言われていたが、戦後、八方手を尽しても子供達の行方が知れず、わずかに、最後の手掛りとして和歌山市の湊南小学校から、終戦直前子供達が広島へ転校したことがわかった。私は、広島へ行ったとなれば、最悪の覚悟もしなければとあきらめながらも新聞社や放送局に頼んで、調べ得るだけ調べた。勿論名古屋にも何の連絡もなかった。

一方、炭坑では、嫁の売込み話が毎日のように来るのでうるさく、遂に玉置の娘と結婚することにしたのだった。そのため一戸を構える必要を生じ、労務係長に相談して^{たけした}岳下町の準

職員社宅に居を移した。

坑内夫、一方八時間労働、四円也。これに出勤による歩合給若干、というのが入山時の私の条件であった。一九四六年二月十七日金融緊急措置令（新円切替）および食糧緊急措置令施行に伴い一方四円が十円五十銭となる。労務係になり連動や日曜出勤で稼ぎ一カ月三百円余。食糧は方数米かたすまいと言って労働方数が多ければ多いほど、加配米が増す。

私は平素から小食だったし、欠勤することなく割合に良く働いたので、食糧には不自由しなかった。また、時々酒やビール・たばこの特配もあった。労働者の代筆や世話をしていた礼にもらう酒やたばこも、かなりあった。私が「自分ができることをするのが当然のこととで、これは私の思想である、相互扶助、相互抑制というものである」と説明して、いくら強く辞退しても、彼等は持つて来たものを置いて、逃げるように帰ってしまう。こうした平穏な日々であった。

この年は、『中央公論』や『改造』が復刊し、中国大陆から共産党の野坂参三が帰国。官公庁の民主化闘争をきっかけに、読売新聞や国鉄の争議など労組の動きも活発化してきた。一方占領目的阻害行為処罰令が公布され、占領軍にたてつく行為に出た者は、沖縄へ連れて

行かれると言う噂もしきりであった。十一月三日、和文・英文の日本国憲法公布。十二月に入って東洋時計争議の弾圧があり一名の死亡者を出している。

労働組合で働く

一九四七（昭和二二）年、私にとってこの年は、総てを芽生えからスタートせよと教え込むように、私を蘇らせた年である。当時、私は内勤で、労務係室内で従業員の保健衛生・福祉関係の事務を受持っていた。同じ労務係でも、外勤は一番方繰込みの関係上五時半に出勤するが、内勤は七時が始業時間である。私は六時半頃出勤するのが常であった。

小正月（おかがみ開き）も済んだ十八日朝、私は平常通り労務係へ出勤したが、間もなく女の子が生れたと、家から連絡があった。別に母子とも異常はないとの事なので、終業時間の五時まで務めて帰宅した。

私は家庭生活らしきものを、戦前はほとんど送ることがなかったので、赤ん坊の顔を生れたその日に見るのは初めてであった。赤ん坊には住所の一字を取って桂子と名附けた。福岡県嘉穂郡桂川町大字吉隈十二番地というのが当時私の住んでいた所であった。

さて、子供が生れたことを喜んでばかりも居れない状態であった。というのは、昨年以来次々に公布される労働関係の法律や、新憲法の勉強、その外に採鉱冶金の本を勉強する必要にせまられていた。勤務も繁雑だったが、労務雑夫という名称の下っ端見習が、最も痛感したことは、会社の鉱員募集の悪い点であった。

会社では、鉱員募集のため少なからぬ費用をかけ、相当の地位の職員を全国各地の職業紹介所へ出張させる。募集係は頭数を揃えるために「労働はやさしく金になり、家があり、食糧も豊富、交通費も支給」など、よいことづくめをならべて連れてくる。ところが実際に山に来てみると、地底の労働は地上では想像できないもので、坑口から切羽まで、傾斜二十五、六度の坂道をキャップランプの乏しい光をたよりに、下りは三十分、上りは五十分もの往復。それも正常の歩行ではなく、下る時には滑らぬように両脚をガニマタにして、相当の速度で集団について行かねばならぬ。上りはまた、爪先を突立てるようにして、フウフウ息を吐いて上る。これだけでも慣れない者にはこの上ない苦痛であるのに、地底の悪い空気と三十三度の高温の中の重労働。家があるといってもその当時の炭坑地帯では文化、娯楽といった甘いムードはない。これらの実情は、募集の時には全く聞かされないのだから、辛棒できなくなった者はダマサレタと怒り、労務係に文句のありつたけをぶちまけて辞めてい

き、定着する者はほんの僅かであった。

私は募集に出張が出来る地位ではなかったが、自分の郷里で炭坑の実情をよく話し、納得づくで連れてくれば一人でも二人でも落付くのではないかと、係長に意見をのべ、名古屋の職業紹介所に出張させてもらうように頼みこんだ。係長は、職員でない者の出張手続は面倒なので、しぶってはいしたが、ともかく二月の中旬に私は名古屋へ出張することになった。滞在予定期間二週間である。出張に際し、労務の先輩から募集の要領を教えられた。それによると「名古屋市内にある、南・中・北の職業紹介所（国営）へ行き求職者をつかまえたなら、ともかくにも炭坑のよい事を並べて連れて来い」と言うのだ。

とにかく私は二週間分の食糧をリュックに入れ旅立った。当時、米など異動さす事は禁じられていたが、炭坑の職員が鉱員募集に出張する時は特令で許され、占領軍の穀物異動許可証を持ち、遠距離切符（四〇キロ以上の国鉄切符は発売制限があった）も証明書で買えた。しかし汽車は超満員で、出入口まで塞ぎ、窓から降りる状態であった。かろうじて窓から車内に入ると、網棚に腰をおろし、座席の背もたれの上に足をのせている朝鮮人が「荷物ここへ」と命令するように指示し、私のリュックを取り上げて、網棚の上をうまく整理し、のせて呉れた。軍隊の不寝番ではないが、立ったなり居眠りし、名古屋へ着いた時は、

かなり疲れを覚えた。

麻生の出張所が名古屋市の港近くに出来たのは、ずっと後の事で、その当時、出張する一般職員は、市外か戦災を免がれた安宿を利用したものだ。私は母の家を宿舍代りにして、宿泊代をチョロマかし、五、六日職業紹介所を廻り、係の人に頼み歩く。所内には大手炭坑の募集広告が一面に張りつけてある。ポスターを持たずに来た自分は、三井、三菱、古河など大手筋炭坑の宣伝広告に、大資本の威力を知らされた。裏話も耳に入る。炭鉱が紹介所へ顔を出す時は、手土産が要るということだ。贈収賄は公然と行われ、料亭で酒宴を開いたり、女を抱かせたり、目に余るものがあつた。職業紹介所が私に対し冷たかったのは当然だ。幸い名古屋は私の郷里でもあるので、私は自分で募集宣伝を試みた。諸々の知己を通じ方々へビラを貼る。『麻生・坑員募集。働き度い者は裏塩町の毛糸屋・杉藤まで、先ず話を聞きに来て下さい。内容を聞いた上で就職を決めて下さい。働く働かないは自分の自由です』

前記の貼紙を見て、私の処へ来たものは可なりの数あつたが、私は炭坑の真相を話し諒解する者だけ連れて帰るつもりでいた。ところが、一週間たったある日、感冒で臥っていたら二通の電報が来た。一本は会社名、もう一本は労組発信である。どちらも文面は「スグカエレ」とだけで、何が何だかさっぱり解らないが、臆測をやめてひと先ず帰山することにし、

色々と求人について母に頼み、入山を決めていた者に連絡して、翌日の夜行で、三人の就職希望者を同行、炭坑に向つた。

筑豊支線碓井駅に出迎えてくれた人は、会社関係と労組関係の二組、どちらも先を争って私に話を持ち込もうとする気配だ。この空気を読み取った私は、先ず順序として、労務係長に挨拶し、同行した入山希望者を労務係員に、食堂へ案内するよう頼んだ。その間に労務係長は私に早口で「君を労働組合長候補に推すようだが、辞退してほしい」と言つた。労組の者達は私を取巻いて、その中の大野邦彦と名乗る男が「とにかく、お宅まで参りましょう」と皆をうながして歩き出す。私はゆっくり一晚考えたいと答えただけで家に帰った。家では玉置の親父をはじめ隣りの和田尊たちが待っていた。そこへ大野邦彦が加わって、私を口説き落そうとかかる。私は風邪気味で疲れているから二、三時間休ませてくれとことわって、ふとんの中にもぐり込んだ。ふと目覚めたら夜も十時近くであつた。玉置、和田、大野達は隣室で酒を飲みながら雑談していた。私も仲間入りして盃をかたむけながら、今度の組合異変を聞いた。

それによると、今までの組合は御用組合で会社の言いなりであつた。それが今度、一種のクーデターの如き方法で解散し、新しくつくりなおすことになった。すでに職場委員や組合

代議員、副組合長まで選挙で決まって、組合長選挙の投票日は四日後に迫っている。ところが前組合長の柿川、藤尾の両名が、また立候補して運動を展開している。折角新しい組合が発足しても、柿川、藤尾のどちらも、初代、二代経験済みの大納屋出身ボスで、組合長として不適任である。大半の新代議員は私の出馬を期待している、という話だ。

会社からは、私が寝ている時に、明日職員辞令を渡したいと言って来たそうであったが、いろいろの話を耳にした私は、労働組合長に立候補する腹を決め、集っている連中にその旨を告げた。それから労務係長宅に出かけ、三日間の休暇願と立候補の意志をのべ、選挙事務長を和田尊氏に決めると、その場から選挙運動を始めた。ポスターと言っても、古新聞に組合長候補者杉とう二郎と書いただけのもの、そのポスターを書く者、貼りに走るもの。私はその晩、三坑の線込場へ出掛け、三番方の入坑者（夜十一時）に顔見せ演説。翌日からの三日間は、朝四時から夜十二時まで飛び廻り、自分の経歴から労働組合長としての抱負をしゃべって歩く。何しろ運動期間は三日しかないのに、坑口は二坑、三坑、弥栄坑と三つ、それが一、二、三番方と九回、坑外夫は、炭務、工作、資材、労務等だが、職場が広く、杭木置場から庄風機、エンドレスと移動して歩くサオトリ（運搬夫）、また機械の音に声を消され勝ちな撰炭場など、雑多な職種の人達に一人でも多く私の声と顔を売ろうとする努力は容易

なことではなかった。飛び廻る三日間はまたたく間にすぎ、投票日を迎えた。投票は朝六時から午後七時まで。即日開票。私の処へ選挙管理委員会から当選を知らせて来たのは、同日夜十一時十分であった。生れて以来私はこれ程感激したことはない。炭坑は縁故関係者が多く私のような輸入者は選挙などの場合は損だ。それに打ち克たねばならぬ苦労を、立候補して身にしてみて感じ取ることが出来た。

たとえ組合長が権力の座であったとしても、労働者解放運動を進めるために、この座は私にとって必要なものであった。選挙が告示した開票結果は左の通りである。

杉 藤	一五五一票
藤 尾	三七四票
柿 川	一八二票
無効票	一六票
合 計	二二二三票

その夜、私の家へ組合幹部が集まり、祝盃を重ねかたがた明日からの運動について話し合った。

さて当選第一夜が明けて組合へ初出勤した私は、組合事務室が狭い上構内電話一本なく、代議員会を開く場所もない有様で、活動的でないことを知った。三役を中心に先ず組合の体制から整えることを強調し、早速代議員会を招集した。討議を重ねた結果、現在ある託児所（後保育所と改称）を移転させ、その後を組合事務所に改装することに意見の一致をみて、組合長と副組合長が会社側との接渉をまかされたが、私は「組合三役に一任する」と決定訂正させ、その衝に当った。この件は山（坑口）の労務や総務係ではどうにもならないことを知り、飯塚市立岩にある麻生本社と話合うことになった。

最初のうち、会社側の態度は強硬で、組合の申出を受けようとはしなかった。しかし私達は諦めず執拗に喰い下った。当時、占領軍政策の一環に、労働組合の助長があり、出炭一トンに対し一円の割で組合基金を積立てる義務が資本家に負わされていた。この事を私達が持ち出したので、話は急速にまとまり、保育所の新設と同時に労組も移った。この事務所は構内のほぼ中央で、診療所、三坑、労務、採鉱係も近くにあり、ちょっとした高台で、グラウンドを挟んで協和会館（後日労働会館と改称）が見える場所である。構内電話も取付け、管理人として前（姓）青年部長一家を住ませた。道路の斜め向い側に診療所と二十床の病室があり、その向うが大きな谷間で、それに水が溜り、ボートを浮べるほど大きな池となって

いた。この池は、炭住敷地造成のためボタを捨て出し、日ならず埋められてしまった。

組合長就任後第一の仕事らしきことはと言えば、配給所（分配所と呼んだ）の隠匿物資摘発である。職場委員からの通告により、このことを知った私は、相手に感付かれないように策を練り、気心のわかった代議員数人を使って要所要所を固め、配給所所長に面接を求めた。私達労組幹部が、隠匿物資の摘発に來たことを知らない配給所所長は、配給台帳を前にして、私の質問に答えていた。私が参考までに倉庫内を見せて呉れと言うと、ちょっとためらったが、すぐ覚悟を決めたか、鍵を持って立ち上り倉庫へ案内した。倉庫内には、市場にはない物資がずい分色々と積まれていたが、私達は米だけに先ず重点をおいていたので、帳簿面と合わない多量の米について質問した。所長は預り米とか有附け米とか種々弁解するが、シドロモドロで見る目にも気の毒な有様だった。

当時は何処の炭坑でも、大なり小なりの隠匿が行われ、権力者共の悪徳が行われていたようである。吉隈坑では本社に意向を聞いた上、労組の申出を受け入れることになり、僅かな非常米を残し、鉱職全員に実質給与として公平分配した。米に次いで甘味料（砂糖、ミツゲンその他）・塩・地下足袋などの摘発、続いてそれらの物資を直ちに特配（時価相場は当然個々が支払う）として、全従業員に渡した。何しろ食糧をはじめ地下足袋など日用品に至るま

で、一般社会では到底手に入らない時代であったが、炭坑には占領軍命令で優先的に必需物資が充分に供給されていた。それを炭坑では、稼働方数を基本とした配給方法なので放出を引締め、そのため地下足袋など真に必要とする職場に働く者でも、不自由なく買えると言うわけではなかった。そこへ摘発物資を特配したので、労働者の喜びは大きく、ひいては私の人気も上昇した。

四月には労働基準法、地方自治法、独占禁止法の公布となり、次々に勉強しないと自分が指導者づらをしておられず、夜も昼も暇さえあれば新聞の切り抜きや、種々の出版物も手に入れて精読し、時代におくれまいと努めた。今日なお手許に残る『英和対照の日本国憲法』（アポロ社発行）を見る時、紙は粗末なザラ紙、表紙に至っては何処かの厚紙ポスターの裏を使っており、当時如何に紙類が貴重であったか想像できるであろう。

四月二十日第一回参議院議員選挙で、社会党四七、自由党三九、無所属一〇八の議席を決め、続いて二十五日の衆議院第二十三回議員選挙は、社会党一四三、自由党一三一、民主党一二四、共産党三五議席と日本の歴史初まって以来の革新政党進出であり、五月に片山哲内閣が樹立された。社会党内閣の誕生三カ月後には、首相官邸へ各炭坑の労働組合長を招聘し閣僚より石炭増産を訴えた。担当商工大臣は水谷長三郎（京都出身）で、私はその席上、大

臣に労働者のおかれている立場を二、三説明し、水長さんの英断を求めたが、権力者ともなれば、しょせん一つ穴のムジナであった。もともと革新政党内閣に大きな期待をかけていたわけではないが、それ以来私は一層、政治屋がきらいになった。